

SHARE yaraicho

正会員 篠原 聡子 殿

正会員 内村 綾乃 殿

国勢調査結果によれば、2010年10月時点で単身世帯は、31.2%となり、最も多い世帯構成となった。東京都区内ではそれが49%にもなるという。晩婚化および非婚化などによる単身期間の長期化に伴い、ファミリータイプマンションの空室の増加、ワンルームマンション規制に伴う地域の空洞化が懸念され、シェアハウスは単身者の新しい居住形式としての地域再生モデルとして期待されることになった。また、家族という社会的単位が急速に縮減し、家族内の文化的継承・相互扶助などのネットワークが縮退した今日状況に対して、社会的単位としての家族に対応する専用住宅というシステム自体の脆弱性も指摘され、血縁の家族によらないネットワークの構築を目指すシェアハウスは、新たな選択肢として位置付けられることになった。しかし、脱法シェアハウスの劣悪な住環境が社会問題化することによって、シェアハウスの規範となるべき建築の出現が待たれていた。

そのような社会的背景のなかで、「SHARE yaraicho」は、7人のためのシェアハウスとして計画された。内部空間は、個室のための3つの箱が鉛直方向に層間600の隙間を保たれて重層し、その隙間状のスペースを介して、1階から3階まで流動的に連続するコモンスペースが形成されている。そしてこの建築では、3層分のコモンスペースの中に個室が浮遊もしくは漂流するという独創的な空間モデルが提案されている。その特筆すべき隙間は、コモンスペースに拡がりを与え、上下階の遮音性を確保し、住人同士のほどよい距離感を保ちつつ、通風を促し、飾り棚や物置もしくはゲストの寝床にもなるという魅力的な空間である。

ファサードは街に対して閉じることをしないように半透明のテント膜で仕切られ、内部の生活が外部ににじみ出るようにしてある。1階ではファスナーで気軽に開放されて、高さ9.3mの吹抜を擁するエントランスホールを兼ねた作業場ではパーティーが催されたり、この建築で使用する家具を居住者がDIYで製作したりしており、それらの様子は近隣に開かれていて、地域社会に溶けこむ契機を宿している。2階には共用の本棚があって本もシェアされ、屋上のハーブガーデンもシェアされる。3階の広間とキッチンには、層間の隙間がもたらす不思議な浮遊感と躍動感があり、何よりもここに集まる居住者達の和やかな顔がこの空間のあたたかみを感じさせてくれる。

「SHARE yaraicho」は、個室とコモンスペースを類型的な関係として捉えるのではなく、個室をコモンスペースの中に浮遊もしくは漂流させるという空間モデルとして提案することで、シェアハウスが備えるべき個のプライバシーとコモンスペースの充実をその独創的な空間構成によって創出するとともに、地域に開かれた建築の在り方を提案し、シェアハウスとして社会に大きな影響を与えるものとして高く評価される作品である。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。